

## 週日の説教

金 大烈 神父 2008年12月23日(火)

### 《感謝にふるえる心で待ちましょう》

イエス様の誕生日まであと1日となりました。明日の今ごろ、私たちはイエス様のお誕生日を捧げることになります。イスラエル人の1日の数え方では、夕方から新しい1日が始まります。25日と言っても、ユダヤ人のカレンダーでは、明日の日が落ちてからが25日になるわけです。ですから私たちは、クリスマスイブという表現をしています。とにかくイエス様がお生まれになるまであと1日残っています。

今ここにいらっしゃる方のほとんどが、子どもを産んだ経験のある方だと思います。最初に子どもを産んだときのことを思い出してください。その前の晩は、不安だったでしょう。そして頻繁に起こる陣痛の経験を覚えていますね。

人間は、自分の誕生日を迎えたのに祝ってくれる人がいなくて寂しいと思うのは、まだ物心がついていない証拠です。誕生日を迎える前の日、母親はどのくらい苦しんだのか、どのくらい不安に陥っていたのか、それを考えられるようになって初めて物心がついていると言えるのではありませんか。

今日は、私たちが母と呼んでいるマリア様がどのくらい不安な気持ちで救い主の誕生を祈っていた日なのかを何よりも考えなければならない日です。彼女は、今の時代のように病院に入院して赤ちゃんが産まれるのを待っていたわけではありません。夫のヨセフと一緒に道の上で赤ちゃんの産まれる前日を過ごしたのです。出産のための場所もなかったし、動きながら陣痛も激しくなったでしょう。しかし彼女は信仰の心で、自分のことよりおなかのこどもが素晴らしく、美しく産まれるように自分の痛みも考えずに神経を集中したと思います。

そしてその翌日、私たちが待ち望んだキリストが産まれたのです。

皆様、私たちは、特に女性は、神様から「母性」という素晴らしいものをいただいています。その「母性」を死ぬまでの間にどのくらい生かせるのか、それとも軽んじてしまうのか、それによってたぶんこの世に命を与えられた目的を果せるのか果せないのかが決まるのではないかと思います。

男性には「父性」というものがありますが、「母性」には絶対に負けます。母性を持つ女性にはその母性の美しさがあります。だから、いろいろな人が罪を犯しているのにもかかわらず、この世が続いているのではないかと、公審判(最終審判)が伸びているのではないかと思います。

罪を犯した死刑囚にも泣いている母がいるでしょう。それを考えてみれば、私たちが心から憎く思う人はいなくなります。自分が憎んでいる人にも、その人のために祈っている母がいます。それを考えれば、なぐりつきたい気持ちもなくなるのではないかと思います。

このように、広い心で、相手の立場に立ってみることが、私たちの関わりの中で必要なのではないかと思います。

今日の福音(ルカ1:57-66)に入ってみます。ザカリアが子どもをヨハネと名づけたこと、その途端に舌がほどけて口がきけるようになったこと、それにみな驚いて神様をたたえたこと、そしてこれを奇跡だと思って、山里まわりが賑やかになっている、という内容ですね。

奇跡とは、「ありえない」ことがおこることです。では、「ありえる」ことというのがこの世にあるのでしょうか。「ありえる」者という人がいるのでしょうか。「これは可能だ」と思っていることを考えてみても不思議でないものは一つもありません。私にとっては、このように説教を聞いている皆様の顔を見ても不思議だと思いません。そして何もしなくても心臓が動いていることも不思議です。会いたくても電話でもかけてみようか連絡をとってみようかという心が生じることも不思議です。

この世に奇跡でないものなど何一つありません。そのように考えてみた時、自然に生じるのは「感

謝の心" です。

道端に生えている雑草を見ると、命が与えられていて、生き残るために頑張っています。しかし、いつかは枯れて死んでしまいます。命のために頑張っている雑草の姿を見ても不思議です。

奇跡でないものなど一つもありません。ある意味で信仰も奇跡です。生まれて来ることも奇跡ですが死ぬことも奇跡です。その奇跡をどのように感じるのか、感謝するのか。そして、命の尊さをどのくらい意識するのか。それによって、今この瞬間に、そしてこれから与えられる全てのことに、このような感謝の心を持てるかどうか、決まるのではないかと思います。

結局、私たちは敏感な耳、敏感な目、敏感な心を持たなければなりません。全てを考えて見てください。美しい奇跡ばかりです。それを意識しないでイライラしている私たちを見たら、神様に申し訳ないと思います。

明日はクリスマスです。感謝の心で、ふるえる心で待ち望みましょう。

ありがとうございました。